

病害虫発生予報 第 4 号

(向こう 1 か月間の発生予報)

I 総括表

作物名	病害虫名	地 域	発生量	発生時期	摘要
水稲	葉いもち	全域	並～やや少	並	
	紋枯病	全域	並～やや多	並	
	ツマグロヨコバイ	全域	並	並	
	セジロウンカ	全域	並	並	
	イナゴ	全域	並	並	
	イナゴ(イナゴセリ)	全域	並～やや多	並	
	カメムシ類	全域	やや多	やや早	
りんご	褐斑病	全域	並	並	
	黒星病	全域	並	並	
	斑点落葉病	全域	並	並	
	輪紋病	全域	並	並	
	炭疽病	全域	並	並～やや早	
	キンモンホソガ	全域	並～やや多	並～やや早	
	スモモヒメシンクイ	全域	並	並	
	ナシヒメシンクイ	全域	並	並	
	モモシンクイガ	全域	並～やや多	並～やや早	
	リンゴハダニ	全域	並～やや多	並～やや早	
	ナミハダニ	全域	並～やや多	並～やや早	
	リンゴコカクモンハマキ (ハマキムシ類)	全域	並	並	
なし	うどんこ病	全域	並	並	
	黒星病	全域	並	並	
	黒斑病	全域	並	並	
	輪紋病	全域	並～やや多	並	
	枝幹性病害(胴枯・枝枯病)	全域	並	並	
	クワコナカイガラムシ	全域	並	並	

なし	カメムシ類	全域	やや多	並	
	シンクイムシ類	全域	並	並～やや早	
	ハダニ類	全域	並	並	
	リンゴコカクモンハマキ	全域	並	並	
もも (ネクタリンを除く)	黒星病	全域	並	並	
	せん孔細菌病	全域	並	並	
	灰星病	全域	並	並～やや早	
	シンクイムシ類(モミジガ)	全域	並	並	
	リンゴコカクモンハマキ	全域	並	並	
	モモハモグリガ	全域	並	並	
ぶどう	ハダニ類	全域	並	並	
	晩腐病	全域	並	並	
	さび病	全域	並	並	
	べと病	全域	並	並	
	クビアカスカシバ	全域	並	並	
かき	チャノキイロアザミウマ	全域	並	並	
	うどんこ病	全域	並	並	
	炭疽病	全域	並～やや多	並	
	円星落葉病	全域	並	並	
	カキクダアザミウマ	全域	並	並	
	カキノヘタムシガ	全域	並	並	
	ハマキムシ類	全域	並	並	
	フジコナカイガラムシ	全域	並	並	
トマト	灰色かび病	全域	並	並	
	輪紋病	全域	並	並	
きゅうり	うどんこ病	全域	並～やや多	並	
	灰色かび病	全域	並	並	
	べと病	全域	並	並	
	褐斑病	全域	並	並	
果菜類 (きゅうり、 トマト等)	ウイルス性病害	全域	並	並	
	アザミウマ類	全域	やや多	並	
	アブラムシ類	全域	並～やや多	並	

77° 51分科 野菜	黒斑細菌病	全域	並	並	
	軟腐病	全域	並～やや多	並	
	コナガ	全域	並～やや少	並	
	ウワバ類	全域	並～やや多	並	
キャベツ	黒腐病	全域	並	並	
	菌核病	全域	並	並	
はくさい	ピシウム腐敗病	全域	並	並	
レタス	すそ枯病	全域	並	並	
	べと病・菌核病・灰色かび病	全域	並～やや少	並	
	斑点細菌病	全域	並	並	
	軟腐病・腐敗病	全域	並	並	
アスパラガス	茎枯病	全域	並	並～やや早	
ねぎ	黒斑病・葉枯病	全域	並	並	
	べと病	全域	並	並	
	さび病	全域	並	並	
野菜・花 き共通	アザミウマ類	全域	やや多	並	
	アブラムシ類	全域	並～やや多	並	
	コナジラミ類	全域	並	並	
	ハモグリバエ類	全域	並～やや多	並	
	オオタバコガ	全域	並～やや多	並	
	ヨトウガ類	全域	並～やや多	並	
	ハダニ類	全域	並～やや多	並	

※発生時期の「－」は、発生時期の関係ないものや発生中のものを示す。

※地域指定がある場合は、その地域以外は、発生量、発生時期とも「並」を示す。

Ⅱ 向こう1か月の天候の見通し及び予報の根拠にかかる気象要因

1 向こう1か月の天候の見通し（気象庁 令和8年7月16日発表）

○関東甲信地方【7月18日～8月17日】

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高い。特に、期間の前半は気温がかなり高くなる見込み。

○関東甲信地方の向こう1か月の平均気温、降水量、日照時間の見通し

区 分	見通し	予想される出現確率（％）		
		低い（少ない）	平年並	高い（多い）
平均気温	高い	10	30	60
降 水 量	平年並	30	40	30
日照時間	平年並	30	40	30

2 予報の根拠にかかる気象要因

（＋）は発生を増加させる要因、（－）は発生を減少させる要因を示す。

Ⅲ 水 稲

1 葉いもち

（1）予報の内容 発生量：平年並～やや少ない 発生時期：平年並

（2）予報の根拠

①いもち感染予測モデル「BLASTAM」によると、7月第1半旬から第2半旬にかけての感染好適条件の出現数は平年と比べやや多かったが、7月第3半旬から第4半旬にかけては平年と比べかなり少なかった。

②7月中旬の葉いもち発生状況調査では、7月8日以降の天候の推移により、葉いもち病斑の進展は抑制されていた。

（3）防除上の留意点

①水田に放置された補植用苗は感染源になりやすいため、早急に処分する。

②気象情報や葉いもち感染予測モデル「BLASTAM」等の予測情報に注意し、ほ場観察による早期発見に努め、発生が確認されたら直ちに防除する。

③窒素過多は、いもち病の発生を著しく助長させるので、過剰な追肥は控える。

④「コシヒカリ」、「あきたこまち」、「風さやか」の『葉いもちに対する感受性の高まる葉色の目安』が「長野県農作物病害虫・雑草防除基準」（以下「県防除基準」という。）p.71に掲載されているので参考とする。

2 紋枯病

（1）予報の内容 発生量：平年並～やや多い 発生時期：平年並

（2）予報の根拠

①前年、病斑上に形成された菌核が土中で越冬し伝染源となるため、前年に発生したほ場では、本年も発生しやすい。昨年は、全県でほぼ平年並の発生であったことから、伝染源の量も平年並であると推定される。

②気象要因（＋）

向こう1か月の気象予報では、気温は高いと予想されている。

（3）防除上の留意点

①昨年発生が多かったほ場では注意する。

②病斑が上位葉鞘に進展し始める時期（出穂2週間前頃）に防除する。

3 ツマグロヨコバイ

(1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**

(2) 予報の根拠

①7月上旬の巡回調査（本田ネット20回振）では、幼虫捕獲頭数は平年並～やや少なかった。

②前年の成虫発生量は、平年並であったため、本年の成虫発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上の留意点

①粒剤は、水深3cm以上の湛水状態で散布し、7日間は止め水とする。

②薬剤抵抗性の発達を遅らせるため、同一系薬剤の連用を避ける。

4 セジロウンカ

(1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**

(2) 予報の根拠

①7月上旬の巡回調査（本田ネット20回振調査）では、成虫の捕獲は平年と比べ少なかったが、例年7月下旬以降に捕獲頭数が増加する。

②5月～7月14日までのJPP-NETによる「ウンカ飛来予測システム」では、セジロウンカの飛来予測回数が平年と比べ少ない。

(3) 防除上の留意点

①海外飛来性害虫であるため、発生予察情報に注意する。

②防除対象となる第2世代幼虫の防除適期は、7月下旬から8月中旬と予想される。

③若齢幼虫は株元に生息するので、薬剤は株元までかかるよう丁寧に散布する。

5 イナゴ

(1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**

(2) 予報の根拠

①7月上旬の巡回調査（本田ネット20回振調査）では、幼虫捕獲頭数は平年と比べやや少なかった。

②前年の成虫発生量は、平年並であったため、本年の成虫発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上の留意点

7月中旬頃までに防除する。

6 イネツトムシ（イチモンジセセリ）

(1) 予報の内容 発生量：**平年並～やや多い** 発生時期：**平年並**

(2) 予報の根拠

①千曲市に設置した黄色粘着トラップによる調査では、第1世代成虫の誘殺開始は7月第2半旬であり、ほぼ平年並であった。

7月第1半旬～第3半旬までは誘殺頭数は、平年と比べ多かった。

②7月上旬の巡回調査（本田ネット20回振調査）では、成虫の捕獲はなかった。

(3) 防除上の留意点

北信地域の晩植地域における第2世代幼虫の防除適期は、例年は8月上旬頃である。

7 カメムシ類（斑点米）

(1) 予報の内容 発生量：**やや多い**

発生時期：**やや早い**

(2) 予報の根拠

①7月上旬の巡回調査（本田ネット20回振調査）では、斑点米カメムシ類の捕獲頭数は、平年並であったが、発生地点率は平年と比べやや高かった。

②県内6か所に設置した予察灯の調査では、主要種であるアカヒゲホソミドリカスミカメの発生ピークは平年と比べやや早かったものの、誘殺数はほぼ平年並であった。一方、アカスジカスミカメの誘殺数は、上田市及び須坂市の2地点で平年と比べ多かった。

③気象要因（+）

向こう1か月の気象予報では、気温は高いと予想されており、カメムシ類の活動が活発になると予想される。

(3) 防除上の留意点

①は場周辺のイネ科雑草（特にイタリアンライグラス、スズメノカタビラ等）が発生源となるので、定期的に草刈りを行う。ただし、出穂間近の草刈りはカメムシ類を本田内に追い込むおそれがあるため、出穂2週間前までに終了させる。

②斑点米の発生は、出穂の早い品種や作型で多くなる。

③薬剤散布は、茎葉散布剤の場合は出穂10日後頃を目安に実施する。粒剤の場合は、キラップ粒剤は出穂期に、その他の粒剤は出穂7日後頃を目安に散布する。

④発生が多い場合は、1回目の防除の7～10日後に2回目の防除を行う。

⑤粒剤は、アカヒメヘリカメムシやクモヘリカメムシなどの中・大型種には防除効果が低いため、種を確認のうえ選択する。

⑥近年、全県的にアカスジカスミカメの発生が多くなってきている。出穂7～10日後よりも早い薬剤散布は、防除効果が劣るため散布時期に注意する。また、本田内のノビエ、ホタルイ等はアカスジカスミカメ成虫の飛来と増殖を促すため、除草を徹底する。

IV りんご

1 褐斑病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
(2) 予報の根拠
①巡回調査では、東信地域および北信地域の一部に発生がみられた。
②須坂市（果樹試験場）の無防除樹（ふじ）では、5月13日に初発がみられ、7月16日時点の調査では発病葉率は6.5%である。
(3) 防除を行う際の留意点については、「県防除基準」を参照し、これに基づいて定期的な防除を実施する。

2 黒星病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
(2) 予報の根拠
①巡回調査では、北信地域で発生がみられた。
②須坂市（果樹試験場）の無防除樹における新梢の発病葉率は、7月8日時点で12.3%であり、平年よりやや少ない。
(3) 防除上の留意点
梅雨明け後の高温期は感染が停滞するが、発生が多い園では定期的に防除する。

3 斑点落葉病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
(2) 予報の根拠
巡回調査では、北信地域の一部で発生がみられ始めた。
(3) 防除上の留意点
例年、6月中下旬頃から発生が増える。今後、降雨が多くなり、多発が予想される場合は、「県防除基準」を参照し、定期的に防除する。

4 輪紋病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
(2) 予報の根拠
越冬伝染源量は、平年並とみられる。
(3) 防除上の留意点
①「県防除基準」を参照し、薬液が十分かかるように定期的に防除する。
②降雨が続くと予想される場合は、散布間隔を10日程度に縮める。
③気温が高く、降雨によって濡れ時間が長いと、果実感染が増加するので注意する。

5 炭疽病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並～やや早い**
(2) 予報の根拠
①越冬伝染源量は、平年並と予想される。
②りんごの生育は進んでおり、発病も平年並からやや早まるものと予想される。
(3) 防除上の留意点
①「県防除基準」を参照し、薬液が十分かかるように定期的に防除する。
②降雨が続くと予想される場合は、散布間隔を10日程度に縮める。
③気温が高く、降雨によって濡れ時間が長いと、果実感染が増加するので注意する。

6 キンモンホソガ

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並～やや多い** 発生時期：**平年並～やや早い**
(2) 予報の根拠
①巡回調査では、一部のほ場で寄生葉がみられた。
②須坂市（果樹試験場）のフェロモントラップによる第1世代成虫の誘殺頭数は、平年と比べ多い傾向であった。
(3) 防除上の留意点
「県防除基準」を参照し、防除する。

7 スモモヒメシンクイ

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
(2) 予報の根拠
須坂市（果樹試験場）のフェロモントラップによる6月の誘殺頭数はほぼ平年並であった。
(3) 防除上の留意点
①第2世代成虫は、平年では8月上旬頃から発生するので、重要な防除時期となる。
②「県防除基準」を参照し、シンクイムシ類に登録のある薬剤を選択し、丁寧に散布する。多発園では散布間隔を約10日間にして防除する。

8 ナシヒメシンクイ

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
(2) 予報の根拠
巡回調査では、芯折れ症状の発生はみられなかった。
(3) 防除上の留意点
①「県防除基準」を参照し、定期的に防除する。
②第2世代幼虫の防除適期は、平坦地では7月中下旬頃である。

9 モモシンクイガ

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並～やや多い** 発生時期：**平年並～やや早い**
(2) 予報の根拠

須坂市（果樹試験場）のフェロモントラップによる越冬世代成虫の誘殺頭数は、平年と比べかなり多い。

- (3) 防除上の留意点

- ①「県防除基準」を参照し、定期的に防除する。
②気温が高めに推移すると、卵期間が短くなるため、散布間隔の 10～14 日を守り防除する。
③被害果は土中に埋めるなどして、適切に処理する。

10 リンゴハダニ

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並～やや多い** 発生時期：**平年並～やや早い**
(2) 予報の根拠

- ①巡回調査では、県下全域で発生がみられ、昨年同時期より広域でみられている。
②気象要因（＋）
向こう 1 か月の気象予報では、気温は高いと予想されている。

- (3) 防除上の留意点

- ①園地の発生状況に注意し、密度が増加する前に、「県防除基準」を参照し、殺ダニ剤を散布する。
②散布むらが生じないようにする。

11 ナミハダニ

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並～やや多い** **平年並～やや早い**
(2) 予報の根拠

- ①巡回調査では、南信地域の一部と、北信地域の多くの地点で発生がみられ、一部では多かった。
②気象要因（＋）
向こう 1 か月の気象予報では、気温は高いと予想されている。

- (3) 防除上の留意点

園地の発生状況に注意し、密度が増加する前に、「県防除基準」を参照し、殺ダニ剤を散布する。

12 リンゴコカクモンハマキ

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
(2) 予報の根拠

- ①越冬世代成虫の発生量及び発生時期は、全般的に平年並であった。
②巡回調査では、幼虫による新梢被害はみられなかった。
③須坂市（果樹試験場）の越冬世代成虫のフェロモントラップ調査では誘殺されなかった。

- (3) 防除上の留意点

- ①「県防除基準」を参照し、防除する。
②平地での第 2 世代幼虫の防除適期は、8 月上旬頃である。

V なし

1 うどんこ病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
(2) 予報の根拠
巡回調査では、発生はみられなかった。
(3) 防除上の留意点
「県防除基準」を参照し、定期的に防除する。

2 黒星病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
(2) 予報の根拠
巡回調査では、発生はみられなかった。
(3) 防除上の留意点
「県防除基準」を参照し、定期的に防除する。

3 黒斑病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
(2) 予報の根拠
巡回調査で発生はみられなかった。
(3) 防除上の留意点
①「県防除基準」を参照して定期的に防除する。
②特に西洋なしは、本病に罹りやすいので注意する。

4 輪紋病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並～やや多い** 発生時期：**平年並**
(2) 予報の根拠
越冬伝染源量は、平年並と予想される。
(3) 防除上の留意点
①「県防除基準」を参照し、間隔をあけすぎないように定期的に防除する。
②特に西洋なしは、本病に罹りやすいので注意する。

5 枝幹性病害（胴枯病・枝枯病）

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
(2) 予報の根拠
巡回調査で発生はみられなかった。
(3) 防除上の留意点
「県防除基準」を参照して定期的に防除する。

6 クワコナカイガラムシ

(1) 予報の内容 発生量：平年並 発生時期：平年並

(2) 予報の根拠

巡回調査で発生はみられず、平年並の発生で推移していると予想される。

(3) 防除上の留意点

①園内の発生状況に注意し、「県防除基準」を参照し、防除する。

②常発地など多発が予想される園では、特別散布として有機リン剤などカイガラムシ類の防除に効果の高い薬剤を、2週間間隔で2回以上散布する。なお、有機リン剤を使用する際は、使用時期（収穫前日数）に注意する。

7 カメムシ類

(1) 予報の内容 発生量：やや多い 発生時期：平年並

(2) 予報の根拠

①巡回ほ場で被害果はみられなかったが、チャバネアオカメムシはフェロモントラップに常時、誘殺がある。

②西日本を中心に発生量が多いとの情報がある。

(3) 防除上の留意点

①7月中旬以降、園地内の飛来状況を確認する。特に山際で毎年飛来がみられる園地では、気温の上昇につれて飛来機会が多くなる傾向がある。

②定期的に園内を観察し、カメムシ類を発見した場合はカメムシ類に登録のある薬剤を速やかに散布する。

③有機リン剤は残効性がやや短く、ネオニコチノイド剤は吸汁阻害効果がある。有機リン剤を使用する際は、使用時期（収穫前日数）に注意する。

④合成ピレスロイド剤は指定地域で利用できるが、指定地域以外では使用しない。

8 シンクイムシ類

(1) 予報の内容 発生量：平年並 発生時期：平年並～やや早い

(2) 予報の根拠

①巡回調査で発生はみられず、平年並の発生で推移している。

②気象要因（＋）

向こう1か月の気象予報では、気温は高いと予想されている。

(3) 防除上の留意点

①多発園や産卵のピーク時は、防除間隔があきすぎないように「県防除基準」を参照し、防除する。

②産卵のピークは標高によって異なるので、園内をよく点検して、適期防除に努める。

9 ハダニ類

(1) 予報の内容 発生量：平年並 発生時期：平年並

(2) 予報の根拠

巡回ほ場では、一部の園地でナミハダニ、カンザワハダニの発生がみられた。発生量、発生時期ともに平年並に推移していると予想される。

(3) 防除上の留意点

①園内の発生状況に注意し、密度が増加する前に「県防除基準」を参照し、防除する。

②散布むらが生じないように丁寧に散布する。

10 リンゴコカクモンハマキ

(1) 予報の内容 発生量：平年並 発生時期：平年並

(2) 予報の根拠

巡回調査で発生はみられず、平年並の発生で推移していると予想される。

(3) 防除上の留意点

①「県防除基準」を参照して防除する。

②平地での第1世代成虫の発生時期は7月中旬頃である。

Ⅵ もも（ネクタリンを除く）

1 黒星病

(1) 予報の内容 発生量：平年並 発生時期：平年並

(2) 予報の根拠

巡回調査では、発生はみられなかったが、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上の留意点

「県防除基準」を参照し、防除する。

2 せん孔細菌病

(1) 予報の内容 発生量：平年並 発生時期：平年並

(2) 予報の根拠

巡回調査では、東信地域でわずかに発病葉がみられた。

(3) 防除上の留意点

①果実や枝葉への感染は見つけ次第、必ず取り除き、埋没処分等を行う。

②「県防除基準」を参照し、防除する。

③台風が襲来すると感染量が増えるので、気象情報にも注意する。

3 灰星病

(1) 予報の内容 発生量：平年並 発生時期：平年並～やや早い

(2) 予報の根拠

巡回調査では、発生はみられなかったが、ものの生育は進んでおり、灰星病の発生も平年並からやや早いと予想される

(3) 防除上の留意点

「県防除基準」を参照し、定期的に防除する。

4 シンクイムシ類（モモシンクイガ）

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
(2) 予報の根拠
長野市のフェロモントラップ（病害虫防除部）調査では、6月は誘殺されなかったが、農業農村支援センター調査では誘殺が増えている。
(3) 防除上の留意点
①「県防除基準」を参照し、定期的に防除する。
②7月下旬～8月上旬に除袋する品種（川中島白桃等）では、除袋後にシンクイムシ類の寄生を受けないよう、除袋後すみやかに防除する。

5 リンゴコカクモンハマキ

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
(2) 予報の根拠
巡回調査では、幼虫による新梢被害はみられなかった。
(3) 防除上の留意点
「県防除基準」を参照し、防除する

6 モモハモグリガ

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
(2) 予報の根拠
①巡回調査では、第2世代幼虫による寄生葉はみられなかった。
②須坂市（果樹試験場）のフェロモントラップによる誘殺頭数は、平年と比べ少ない。
③長野市のフェロモントラップ調査では、6月は誘殺されなかった。
(3) 防除上の留意点
「県防除基準」を参照し、防除する。

7 ハダニ類

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
(2) 予報の根拠
巡回調査では、6月上旬調査で東信地域の1ほ場でのみ発生がみられた。
(3) 防除上の留意点
園地の発生状況に注意し、密度が増加する前に、「県防除基準」を参照し、防除する。

VII ぶどう

1 晩腐病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
(2) 予報の根拠
近年の越冬伝染源量は、平年並とみられる。

- (3) 防除上の留意点
①「県防除基準」を参照し、降雨前後にすみやかに防除する。
②薬剤耐性菌出現を防止するため、同一系統・同一薬剤は連用せず、異なる系統の薬剤でローテーション散布する。
③薬剤の散布むらが生じないように新梢管理を行う。
④防除実施後は、できるだけ早く袋掛けを行う。

2 さび病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
(2) 予報の根拠
越冬伝染源量は、平年並とみられる。
(3) 防除上の留意点
べと病防除に用いるボルドー液の散布で、発病が軽減される。

3 べと病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
(2) 予報の根拠
①巡回調査では、発生はみられなかった。
②須坂市（果樹試験場）の無防除樹（巨峰）では、7月7日現在発病を認めていない。
(3) 防除上の留意点
①「県防除基準」を参照し、降雨前あるいは降雨後、すみやかに防除する。
②薬剤耐性菌出現を防止するため、同一系統・同一薬剤は連用せず、異なる系統の薬剤でローテーション散布する。
③薬剤の散布むらが生じないように新梢管理を行う。
④防除実施後は、できるだけ早く袋掛けを行う。

4 クビアカスカシバ

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
(2) 予報の根拠
小布施町のフェロモントラップでは6月第3半旬に、今年度ここまでの最多の誘殺頭数を記録し、頭数は平年の2倍であった。
(3) 防除上の留意点
①発生園地では、袋かけ後の7月下旬～8月上旬に、枝幹部に薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。
②樹内部に発生していると、7月下旬以降より虫糞排出が目立ち始めるので、発見したら幼虫を捕殺する。

5 チャノキイロアザミウマ

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
(2) 予報の根拠

巡回調査では、被害葉はみられなかった。

(3) 防除上の留意点

- ①例年、梅雨明け後から、発生量が増加する。
- ②できるだけ早く袋掛けを行い、発生がみられる場合は、袋掛け後も防除を行う。

VIII かき

1 うどんこ病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
- (2) 予報の根拠
巡回調査では平年並の発生であった。
- (3) 防除上の留意点
「県防除基準」を参照し、防除する。

2 炭疽病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
- (2) 予報の根拠
気象要因（＋）
6月にややまとまった降雨があった。
- (3) 防除上の留意点
 - ①「県防除基準」を参照し、防除する。
 - ②降雨前に重点的に防除する。

3 円形落葉病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
- (2) 予報の根拠
 - ①巡回調査で発生はみられず、平年並の発生であったと思われる。
 - ②気象要因（＋）
向こう1か月は平年並の降水が予想されている。
- (3) 防除上の留意点
 - ①「県防除基準」を参照し、防除する。
 - ②7月中旬頃までが主な感染時期とされるため、重点的に防除する。

4 カキクダアザミウマ

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
- (2) 予報の根拠
巡回調査で発生はみられず、平年並の発生であった。
- (3) 防除上の留意点
「県防除基準」を参照し、防除する。

5 カキノヘタムシガ

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
- (2) 予報の根拠
巡回調査で発生はみられず、平年並の発生であった。

(3) 防除上の留意点

「県防除基準」を参照し、防除する。

6 ハマキムシ類

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
- (2) 予報の根拠
巡回調査で発生はみられず、平年並の発生であった。
- (3) 防除上の留意点
「県防除基準」を参照し、防除する。

7 フジコナカイガラムシ

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
- (2) 予報の根拠
巡回調査で発生はみられず、平年並の発生であった。
- (3) 防除上の留意点
「県防除基準」を参照し、防除する。

IX 野菜

1 トマト灰色かび病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
- (2) 予報の根拠
巡回調査では、中信地域の施設栽培（半促成）ほ場で発生がみられたが、発生量は平年並であった。
- (3) 防除上の留意点
 - ①多湿条件で発生しやすいので、過度の密植は避け、適正なかん水や換気等によって施設内の湿度低下に努める。
 - ②葉などに落ちた花卉から発病する場合もあるので、適切に処分する。
 - ③「県防除基準」を参照し、防除する。薬剤耐性菌の出現を防止するため、同一系統・同一薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

2 トマト輪紋病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
- (2) 予報の根拠
 - ①巡回調査では、北信地域の施設栽培（半促成）ほ場で発生がみられたが、発生量は平年並であった。
 - ②例年、梅雨期後半からの発生が多い。
- (3) 防除上の留意点
 - ①被害茎葉が次作の伝染源となるので、ほ場外で適切に処分する。
 - ②「県防除基準」を参照し、発病初期に防除を行う。

3 キュウリうどんこ病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並～やや多い** 発生時期：**平年並**
- (2) 予報の根拠
- ①巡回調査では、中信地域の施設栽培ほ場で発生がみられ、平年と比べ発生量は多かった。
 - ②例年、生育後半に向けて発生が多くなる。
- (3) 防除上の留意点
- ①「県防除基準」を参照し、7～10日間隔で2～3回薬剤防除を行う。その後も発生状況に応じて適宜に防除する。
 - ②多発生してからでは防除困難であるため、時期を逸することのないよう防除する。
 - ③薬剤耐性菌出現を防止するため、同一系統・同一薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
 - ④下葉で発病の著しいものは摘葉し、ほ場外へ持ち出す。

4 キュウリ灰色かび病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
- (2) 予報の根拠
- 巡回調査では、発生はみられなかった。
- (3) 防除上の留意点
- ①施設栽培では、通風をよくする。
 - ②「県防除基準」を参照し、防除する。
 - ③病斑上に形成される胞子により第二次伝染が起こるので、発病葉はすぐに摘葉し、適正に処分する。
 - ④前年に発生したほ場では、残渣や資材に病原菌が付着している場合があるので十分に注意する。

5 キュウリべと病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
- (2) 予報の根拠
- 巡回調査では、発生はみられなかった。
- (3) 防除上の留意点
- ①多湿条件で多発しやすい。また、生育後半や肥料切れで発生しやすくなるので注意する。
 - ②下葉で発病の著しいものは摘葉し、適正に処分する。
 - ③降雨や、灌水時の地表面からの水のはね上がりによって感染することが多いので、ポリマルチ、敷わら等によって水滴のはね上がりを防ぐ。
 - ④「県防除基準」を参照し、予防防除を基本とする。

6 キュウリ褐斑病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
- (2) 予報の根拠
- ①巡回調査では、発生はみられなかった。
 - ②高温多湿条件で多発する。
- (3) 防除上の留意点
- ①「県防除基準」を参照し、予防防除を基本とする。
 - ②病斑上に形成される胞子により第二次伝染が起こるので、発病葉はすぐに摘葉し、適正に処分する。
 - ③前年発生したほ場では、残渣や資材に病原菌が付着している場合があるので十分注意する。

7 果菜類（トマト、きゅうり等）のウイルス性病害

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
- (2) 予報の根拠
- ①巡回調査では、発生はみられなかった。
- (3) 防除上の留意点
- ①発病株は直ちに抜き取り、ほ場外に持ち出し適切に処分する。
 - ②感染植物を吸汁したアザミウマ類及びアブラムシ類が健全株を吸汁することにより伝染する（アザミウマ類及びアブラムシ類の防除については次項8及び9を参照）。
 - ③汁液伝染する恐れがあるので、畝ごとに使用するハサミを替えるなどして、汚染されたハサミにより、ほ場全体に拡がらないように注意する。

8 果菜類（トマト、きゅうり等）のアザミウマ類

- (1) 予報の内容 発生量：**やや多い** 発生時期：**平年並**
- (2) 予報の根拠
- ①巡回調査では、中信地域のトマト（露地栽培）、南信及び中信地域のきゅうり（施設栽培）、北信地域のきゅうり（施設栽培、露地栽培）で発生がみられた。
 - ②青色粘着トラップによる調査では、3地点中1地点（塩尻市）で平年と比べてかなり多い。
 - ③気象要因（+）
- 向こう1か月の気象予報では、気温は高く、降水量は平年並と予想されている。
- (3) 防除上の留意点
- ①「県防除基準」を参照し、防除する。
 - ②施設栽培で、日中の気温上昇により側窓を解放する場合は、防虫ネットを設置するなどし、飛び込みを防ぐ。

9 果菜類（トマト、きゅうり等）のアブラムシ類

(1) 予報の内容 発生量：**平年並～やや多い** 発生時期：**平年並**

(2) 予報の根拠

①巡回調査では、東信地域のトマト（露地栽培）、中信地域のきゅうり（施設栽培）、北信地域のきゅうり（施設栽培、露地栽培）で発生がみられた。

②露地栽培では、高温となる夏は減少する傾向があるが、施設栽培では一年中発生する。

③黄色粘着トラップによるアブラムシ類有翅虫の6月の誘殺頭数は5地点で平年並～多く、中でも塩尻市では平年に比べかなり多い。

(3) 防除上の留意点

①「県防除基準」を参照し、防除する。

②施設栽培で、日中の気温上昇により側窓を解放する場合は、防虫ネットを設置するなどし、飛び込みを防ぐ。

10 アブラナ科野菜の黒斑細菌病

(1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**

(2) 予報の根拠

①巡回調査では、発生はみられなかった。

②気象要因（＋）

向こう1か月の気象予報では、気温は高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上の留意点

①アブラナ科野菜の連作は避ける。

②品種間の差が大きいので、品種選定に留意する。

③罹病苗を定植すると、生育初期から発生し、降雨によりほ場全面に拡大するので、育苗時の発生に注意し、発病苗は直ちに処分するとともに、発病苗周辺の苗も利用しない。

④発病茎葉は二次伝染源となるので、早期にほ場外に持ち出して処分する。

⑤「県防除基準」を参照し、予防防除を基本とする。

11 アブラナ科野菜の軟腐病

(1) 予報の内容 発生量：**平年並～やや多い** 発生時期：**平年並**

(2) 予報の根拠

①巡回調査では、中信地域のはくさいで発生がみられた。

②例年この時期から発生が増加する。

③気象要因（＋）

向こう1か月の気象予報では、気温は高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上の留意点

「県防除基準」を参照し、防除する。

12 アブラナ科野菜のコナガ

(1) 予報の内容 発生量：**平年並～やや少ない** 発生時期：**平年並**

(2) 予報の根拠

フェロモントラップによる調査では、平年並～少なく、中でも塩尻市、長野市では平年よりもかなり少ない。

(3) 防除上の留意点

①「県防除基準」を参照し、防除する。

②薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統・同一薬剤の連用は避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

13 アブラナ科野菜のウワバ類

(1) 予報の内容 発生量：**平年並～やや多い** 発生時期：**平年並**

(2) 予報の根拠

①巡回調査では、東信地域のキャベツ、ブロッコリー、中信地域のキャベツ、南信地域のブロッコリー、北信地域のキャベツで発生がみられ発生ほ場は多かった。

②気象要因（＋）

向こう1か月の気象予報では、気温は高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上の留意点

①「県防除基準」を参照し、防除する。

②薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統・同一薬剤の連用は避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

14 キャベツ黒腐病

(1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**

(2) 予報の根拠

巡回調査では、発生はみられなかった。

(3) 防除上の留意点

①予防散布を基本として、「県防除基準」を参照し、防除する。

②気象要因（＋）

向こう1か月の気象予報では、気温は高く、降水量は平年並と予想されている。

③過湿、過乾、高温期、肥料切れの場合に発生しやすい。

④雷雨など、強い降雨で作物が傷むと細菌性病害が発生しやすい。

15 キャベツ菌核病

(1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**

(2) 予報の根拠

巡回調査では、発生はみられなかった。

(3) 防除上の留意点

被害株はできるだけ早く処分する。特に菌核形成前にほ場から除去する。

16 ハクサイピシウム腐敗病

(1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**

(2) 予報の根拠

- ①巡回調査では、発生はみられなかった。
- ②梅雨期に発生が多く、近年、発生が増加傾向にある。

(3) 防除上の留意点

- ①高温期は軟腐病が併発しやすいので、軟腐病の防除も行う。
- ②「県防除基準」を参照し、防除する。

17 レタスすそ枯病

(1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**

(2) 予報の根拠

- ①巡回調査では、中信地域の一部のほ場で発生がみられたが、少発生であった。
- ②近年、発生が増加傾向にある。

(3) 防除上の留意点

- ①「県防除基準」を参照し、防除する。
- ②結球始期に重点的に防除する。

18 レタスべと病・菌核病・灰色かび病

(1) 予報の内容 発生量：**平年並～やや少ない** 発生時期：**平年並**

(2) 予報の根拠

- ①巡回調査では、発生はみられなかった。
- ②いずれの病害も、低温で降雨が続く時に発生が多い。
- ③気象要因（一）
向こう1か月の気象予報では、気温は高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上の留意点

- ①「県防除基準」を参照し、防除する。
- ②いずれの病害も、結球始期に重点的に防除する。

19 レタス斑点細菌病

(1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**

(2) 予報の根拠

巡回調査では、発生はみられなかった。

(3) 防除上の留意点

「県防除基準」を参照し、防除する。

20 レタス軟腐病・腐敗病

(1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**

(2) 予報の根拠

- ①巡回調査では、発生がみられなかった。
- ③気象要因（一）

向こう1か月の気象予報では、気温は高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上の留意点

- ①「防除基準」を参照し、防除する。
- ②降雨前あるいは降雨後、速やかに防除する。
- ③土壌の過湿は発病を助長するので、常発地・多発地では、排水対策を行う。

21 アスパラガス茎枯病

(1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並～やや早い**

(2) 予報の根拠

- ①巡回調査では、南信地域の一部の雨除け栽培ほ場、中信地域の露地栽培ほ場、北信地域の露地栽培ほ場で発生がみられ、平年と比べ初発時期がやや早かった。

②気象要因（一）

向こう1か月の気象予報では、気温は高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上の留意点

- ①雨除けをすると、予防効果が期待できる。
- ②防除は、収穫打ち切りから立茎完了までの期間が特に重要である。
- ③切り株や残さに付着した病原菌が感染源となるため、土寄せや敷きワラ等で泥はねを防ぎ、また病茎は早期に抜き取って、ほ場外へ持ち出し適切に処分する。

22 ねぎの黒斑病・葉枯病

(1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**

(2) 予報の根拠

- ①巡回調査では、南信地域で発生がみられた。
- ②降水量が多いと多発する。

(3) 防除上の留意点

- ①連作を避ける。
- ②2次感染源となるので、被害葉をほ場内に放置しない。
- ③「県防除基準」を参照し、防除する。

23 ねぎのべと病

(1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**

(2) 予報の根拠

- ①巡回調査では、発生はみられなかった。
- ②降水量が多いと多発する。

(3) 防除上の留意点

- ① ほ場の排水対策を行う。
- ②「県防除基準」を参照し、防除する。

24 ねぎのさび病

(1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**

(2) 予報の根拠

- ①巡回調査では、南信地域で発生がみられた。

②降水量が多いと多発する。

(3) 防除上の留意点

「県防除基準」を参照し、防除する。

25 アザミウマ類（野菜、花き全般）

(1) 予報の内容 発生量：やや多い 発生時期：平年並

(2) 予報の根拠

①巡回調査では、前述の果菜類の他では、東信地域のきく、南信地域、中信地域のねぎで発生がみられ、南信地域のねぎの被害葉率が平年と比べ高かった。

②青色粘着トラップによる調査では、3地点中1地点（塩尻市）で平年と比べてかなり多い。

③気象要因（＋）

向こう1か月の気象予報では、気温は高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上の留意点

①育苗期又は定植時に、登録適用のある薬剤を使用する。

②早期発見に努め、「県防除基準」を参照し、多発する前に防除する。

③アザミウマの種類によって、薬剤に対する感受性が異なるので、防除実施後に効果を確認し、系統の異なる薬剤で防除する。

④ほ場周辺の雑草や麦ほ場に発生し、野菜畑へ飛び込む場合があるので、雑草防除等のほ場管理を行う。

26 アブラムシ類（野菜、花き全般）

(1) 予報の内容 発生量：平年並～やや多い 発生時期：平年並

(2) 予報の根拠

①巡回調査では、前述の果菜類の他では、東信地域のばれいしょ、南信地域のアスパラガス、北信地域のキャベツで発生がみられた。

②黄色粘着トラップによるアブラムシ類有翅虫の6月の誘殺頭数は5地点で平年並～多く、中でも塩尻市では平年よりもかなり多い。

③気象要因（＋）

向こう1か月の気象予報では、気温は高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上の留意点

早期発見に努め、「県防除基準」を参照し、多発する前に防除する。

27 コナジラミ類（野菜、花き全般）

(1) 予報の内容 発生量：平年並 発生時期：平年並

(2) 予報の根拠

①巡回調査では、北信地域のトマト（施設栽培）及びきゅうり（露地栽培）でわずかに発生がみられた。

②気象要因（＋）

向こう1か月の気象予報では、気温は高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上の留意点

早期発見に努め、「県防除基準」を参照し、多発する前に防除する。

28 ハモグリバエ類（野菜、花き全般）

(1) 予報の内容 発生量：平年並～やや多い 発生時期：平年並

(2) 予報の根拠

巡回調査では、南信地域、中信地域のねぎにネギハモグリバエの発生がみられ、平年と比べ多かった。

(3) 防除上の留意点

①苗床での防除を徹底する。

②「県防除基準」を参照し、防除する。

③収穫後の残さが発生源となりやすいので、速やかに処分する。

29 オオタバコガ

(1) 予報の内容 発生量：平年並～やや多い 発生時期：平年並

(2) 予報の根拠

①巡回調査では、東信地域のトマト（露地栽培）で産卵がみられた。

②各地で実施しているフェロモントラップ調査によると、東信地域などで6月の誘殺頭数が平年と比べ多い。

(3) 防除上の留意点

①「県防除基準」を参照し、防除する。

②同一系統・同一薬剤の連用は避け、異なる系統の薬剤でローテーション散布する。

③結球野菜では、結球始期に1週間間隔で2～3回重点的に防除を行う。

30 ヨトウガ類（野菜、花き全般）

(1) 予報の内容 発生量：平年並～やや多い 発生時期：平年並

(2) 予報の根拠

①巡回調査では、被害はみられなかった。

②フェロモントラップによる調査では、ヨトウガの誘殺頭数は、全般に平年並、ハスモンヨトウの誘殺頭数は3地点中2地点（塩尻市、須坂市）で平年と比べかなり多かった。シロイチモジヨトウの誘殺頭数は、塩尻市で平年と比べやや多かった。

(3) 防除上の留意点

「県防除基準」を参照し、防除する。

31 ハダニ類（野菜、花き全般）

(1) 予報の内容 発生量：平年並～やや多い 発生時期：平年並

(2) 予報の根拠

①巡回調査では、北信地域のアスパラガス（雨よけ栽培）で発生がみられた。

②高温、乾燥状態で多発しやすい。

③気象要因（＋）

向こう1か月の気象予報では、気温は高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上の留意点

- ①早期発見に努め、「県防除基準」を参照し、多発する前に防除する。
- ②薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統・同一薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。